
俺とあいつとの恋NEW

撫子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺とあいつとの恋NEW

【Nコード】

N0632H

【作者名】

撫子

【あらすじ】

組織も壊滅し平和な日が続いていた。コナンは自分の異変に気付く。その異変とは？

工藤君の事が好きだが蘭への思いゆえに恋心を隠す哀。自分の本当の気持ちに気付いた新一。新志です。

プロローグ

おれたちは小学三年生になった。
組織も壊滅し、解毒剤も時間の問題だった。

しかし俺の何かが変わった。

おれの隣は蘭だった。そうだ。
今もそうなはずだ。

その事に疑問を持つ俺がいる。

今の俺の隣は灰原哀だ、と思う自分がいる。
振り払っても消えない思い。

おれはいつたいたいどうなったんだ？
誰か教えてくれ。

今のおれの隣は蘭であると言ってくれ。
灰原はただの相棒であると言ってくれ。

俺は蘭の事が好きだと誰か言ってくれ。
そんな事を思っても頭に浮かぶのは…

灰原哀

第一話 哀の憂鬱

「おれが死ぬと思ったか。お前を殺すまで俺は死なねー。シエリ」。

「はあはあ。夢ね。毎日同じ夢。」

哀はベットの近くにある薬を飲んだ。

「いつまで飲み続けるのかしら。」

時計を見るとやはりは二時を指している。哀は白衣を着て研究室に行った。

哀は引き出しからあるフロップイーを取り出した。A P T X 4 8 4 9 のフロップイーだ。

哀はいろんなこと打ち込んだり、修正したり、薬品を手にしてまぜたりとやる。

これが哀の日課になっていた。

「ごめんなさい蘭さん。私わがままで。」

哀は薬剤をいろいろ調合しあるカプセルを完成させた。

「私まだ彼を失いたくないのよ。」

そうして、カプセルを瓶の中に入れ戸棚にしまった。

時計は七時を指していた。

「おはよう哀ちゃん。」

「おはようございます。灰原さん。」

「おはよう灰原！」

「おはようみんな。江戸川君は？」

「まだ来てないの。」

歩美はしょぼんとした。

哀の胸はチクリと傷んだ。

「お前ら俺を置いてくなよ。」

「コナン君。」

「お前が遅いからじゃねえか。」

「元太だつてたまには遅れるじゃねえか。」

そうして言い争いをしていた。

「なあ、灰原解毒剤いつ完成できる？」

胸はチクチクと痛んだ。彼にだけはうそをつきたくなかった。

「ごめんなさい。まだよ。」

「そっか。できるだけ早くよろしく頼む。」

コナンは少し残念そうな顔をしながらもできるだけ明るくふるまっているように感じた。

哀の胸は痛み続けた。

私は悪魔。

蘭さんは天使。

工藤君を苦しませてるのは私。

「灰原、灰原、」

「どうしたの工藤君。」

「お前こそ。何回も呼んだんだぞ。一人で悩むんじゃないよ。」

彼の言葉は私の心に浸透する。

「運命から逃げるんじゃないぞ。」

いつも私を守って組織を解体させた。

ありがとう工藤君。心から感謝するわ。

第一話 哀の憂鬱（後書き）

投稿遅れました。次はもつとはやく投稿します！
哀ちゃん視点です。

第二話 平行線の関係

コナンは隣の席の灰原を見つめた。

悩んでいるのだろうか？

俺になぜ話してくれないのか？

そのことをなぜ深く考えているのだろうか？

灰原のことをなぜここまで考えているのだろうか？

コナンの頭のなかでぐるぐる回る

灰原の顔を見る。

かわいい。素直に思った。

あの性格があればじゃなきゃなー

アハハ…

そうすると灰原が俺の視線に気づいた。

俺のことを見ている。

灰原の視線とおれの視線はかさなる。

俺の心臓の音はたかなった。

灰原が口で

（何見てんのよ）と言った。

自分も口で

（何でもねー）と言う。

たったこれだけだったのに嬉しくてしかたなかった。

あいつと心が通じ合えたことが嬉しかった

今、俺の頭を支配している感情はいったい何なのか？

この時はまだ分からなかった。

授業が終わると灰原が真っ先に話しかけてきた。

嬉しい。

今の気持はこの言葉だった。

灰原「工藤君、さっきのは用はなに？」

コナン「何でもないって言ってるだろ。」

灰原「じゃあどうして見てたのよ。」

コナン「それはだな……」

歩美「まあまあ二人とも。なかなかおり。」

危なかった。あゆみちゃんがいなかったら言い訳どうしようかと思
った。

そつえばあいつの悩みって何なんだ？

組織関係のことか？

コナン「おい灰原、もしかしてお前の悩みって、組織関連のことか
？」

哀「あら、毎日のことよ。」

コナン「何で言わなかったんだよ。」

なぜか悔しかった。

哀「別に言わなくてもいいでしょ。」

コナン「でも…」

確かにそうだ。

俺に言う必要はない。

でも言っただけよかった。

コナン「一人で抱え込まなくてもいいだろ。相談しろよ。」

哀「安心して、別にそれほどでもないから。」

コナン「じゃあ何悩んでるんだよ。」

あいつのポーカフェイスがくずれた。

下を向いて

小さい声で

あいつは言った。

………ごめんなさい

そしてあいつは泣いた。

俺は泣いているあいつに何もできなかった。

第二話 平行線の関係（後書き）

投稿遅れました。

なんか進展しませんね。

次は進展させます。（たぶん）

第三話解毒剤

そんな時、授業の合図のチャイムがなった。

みんなの話し声が消え、急いで席に戻ろうとした。

コナンは何か聞いたそうだったけどしぶしぶ席へ戻っていった。

（ふー）

心の中で溜息をした。

彼が心配する気持ちはとても嬉しかった。

でも、この事を知ったら私から離れる。

そんな思いを心のなかで思っていた時、頭に何かがあたった。

紙だった。

何悩んでんだよ。

そう書かれていた。

工藤君から初めてもらった手紙。

自分の胸にその手紙をあてた。

横を見ると返事を待ってたので急いで裏に書いた。

何でもないわ。

気にしないで。

ごめんなさい工藤君。

彼の机に投げた。

私は一人ぼっち…

あなたを離したくないの

また紙がきた。

じゃあどうして泣いたんだ。

こんな書き方でしかあなたには伝えられない。

あなたには関係ないわ。

もう少し待って。

絶対もどすから。

そして投げた。

その手紙を見た彼は紙ではわからないと思ったのだろうか。
手紙を出すのをやめた。

私はみんなと帰らなかった。

彼と話すのが怖かった。
ばれるとおもった。

この思いが。

帰ると急いで研究室に入った。

そして解毒剤を出そうとしたとき

「おーい灰原入るぞ」

とつさのことで薬を隠せなかった。
見てしまった。この薬を…

「これって解毒剤だよな」

苦し紛れの言い訳をした

「え、ええ。今、できたわ。ちょうど呼びに行こうとしたの。」

「それがお前の悩みか」

「えっ」

「お前嘘つくんじゃないよ」

何も言えない

本当のことだから…

「なんか言えよ」

彼の怒声は研究室に響き渡る。

でも相変わらず鈍感なのね。

普通だったらきづくはずよね。

この気持ちを…

「それがお前の答えか」

ボタン

そう言って彼は去ってしまった…

第四話失踪

彼がでつていた後、罪悪感が急激に押し寄せてきた。

気分を変えるために研究室に出た。

外は雨が降っていた。

（私の心？それとも工藤君の心？）

ふー

「哀君どうしたんじゃ」

「何でもないわ。」

——
嘘

心配かけたくなかったから…

「もう五時ね。夕食を作ってくるわ。」

「あ、ああ」

はかせと夕食を食べてた途中

ブルルブルル

電話が鳴った

なんとなくいやな予感がした。

博士が珍しく取ってくれた。

「おお、蘭君か」

（蘭さん）

「何、こっちにはいないぞ」

いきなり形相が変わった。

「すまんのー」

あわてて聞く私におろおろしながら答えた。

「博士、何があったの？」

「実は新一君がいなくなつたそうじゃ。」

その言葉を聞いたとたん大雨の中、傘を持たず走りだした。

工藤邸、拝戸シティ、帝丹高校、帝丹小学校…

雨の中、走り回つたがどこにもいなかった。

（そういえば、江戸川君が誕生した場所って…）

（トロピカルランド！）

トロピカルランドへ走つていった。

時計は八時をさし閉館していた。

子供の小ささを利用し鉄格子の隙間から入っていった。

敷地は大きくてなかなか見つからなかった。

雨は体力を奪い、走り回つたので足はもう動かなかった。

「灰原？」

「く、工藤君」

いつきに力が抜け倒れこんだ。

「おい、灰原。大丈夫か？」

「ええ、何とか。」

そついうと私の手を自分の肩に乗せおんぶした。

「な、何すんのよ。」

「だって、お前あるけないだろ。」

言い返すことができなかった。

自分の身を相手に任した。

そんなとき彼が言った。

「なあ、灰原。お前宮野志保に戻らないのか？」

「えっ……」

彼が歩みを止めた。

「やっぱりな……」

彼の言葉がむなしく響き渡った。

第四話失踪（後書き）

三話から書き方を書きました。
次回も読んでください。

第五話 宮野志保消滅？

「どうしてそれを」

（まさかそこまで分かっている何で）

「あの薬いつ作ったんだ。」

「早朝よ。」

彼が聞く質問に答えることしかできない。

雨は激しく降りつづける。

「瓶を取ろうとした手の形。あれは出すときの形だ。」

彼の青い眼は光る。

「もしお前も戻る気ならもう一つあったはずだ。」

「真実をはなせよ。」

やさしい声で彼が言った。

その瞬間私の心の呪縛が解きはなれた。

「正解よ。工藤君。」

「あんなに攻めちまってごめんな。」

「悪いのは私よ。」

「そういえば、なんで解毒剤を隠したんだ？」

（あいかわらず、恋愛には鈍感。）

「それくらい、分かりなさい。」

そう言い争う、うちに雨がやんでいた。

学校に行くといつもどおりガヤガヤしていた。

パーカーのポケットには解毒剤が入っている。

江戸川君が来たら呼び出す。それが私の予定だ。
ガラガラ

3・Aの教室が開いた。

工藤君だった。

工藤君に声をかけようとしたが、ひとあし先に工藤君が声をかけた。

「灰原、ちょっといいか。」

「ええ。」

クラスの人たちはその声で静まった。

哀とコナンは両想いとうわさが立っているからだ。

コナンがつれて行ったのは体育倉庫だった。

体育倉庫は体育で使う器具が保管されているところだ。

扉はひとつしかなく窓はない。

「江戸川君。はい」

（もうあきらめなさい。この恋心は。彼は彼女のもの。）
そして解毒剤を彼は受け取った。

（これで終わりね。）

「俺からも話がある。」

「えっ。」

「お前が宮野志保に戻らないのは償いのためか」

「そんなの名探偵さんだったら分かるでしょ。」

「まあな。お前馬鹿か？」

「あなたより馬鹿じゃないわ。」

（なにがしたいの）

「お前が組織を倒したんだからもう償う必要ないなだぜ。」

（何も分かってないあなたは）

「だから何？」

「お前は宮野志保にもどっていいってこと。」

（たとえそうだとしても戻りたくない。）

「そう。」

「何だよ、そんな態度。」

「分かったわ、じゃあ先に教室にもどってるわ。」

ごめんなさい工藤君。

あなたが幸せにしてる姿を見たくないのよ。

第五話 宮野志保消滅？（後書き）

久しぶりです。撫子です。

今回は…うまくいかなかった。

次回にご期待を。

第六話 秘密の計画

「もー、なんだよあいつ。」

（あいつの罪を軽くするために言っただけなのに、何で無視すんだよ。）

「後でなんかいわねえといけねーな。」

小声でつぶやいた。

そんな時携帯電話がなった。

ブルブルブル

蝶ネクタイを口元に近づけた。

そのころ、教室では…

「ついに告白ね。」

「あーどんな告白したんだろう。」

「灰原さん。ウラヤマシー。」

ガラガラ

教室のドアが開いた。

灰原哀だった。

「哀ちゃん。どうだった？」

「一番最初に話しかけたのは歩美だった。」

「なんもないわ。」

その言葉にクラスみんなはくいついた。

「えー灰原さん告白されたんじゃないの？」

「告白？そんな現実的なものじゃないわ。」

そう言っただけで彼女は笑みをうかべた。

「久しぶり、蘭。」

「新一久しぶり。」

「最近、電話してくれないんだもん。」

（そういえば忘れてた。）

「わーりーわーりー。」

「いつ帰ってくるの?。」

「うーん、…。」

（なぜか言えなかったんだ。）

「私ずっと待ってるから。」

胸が締め付けられた。

「ああ。」

そう言って、電話を切った。

終礼が終わると俺は急いで博士の家へ行った。

灰原が帰る前に。

「博士」

そう言って、ドアを開けた。

「おお、新一君。そんなに急いでどうしたんじゃ?」

「灰原の話なんだけどよ、あいつ解毒剤を飲む気ねえらしんだよ。」

「なんじゃ、そんな事か。」

「って知ってたのかよ。」

（なんかむかつく）

「この薬と同じ成分の薬を作ってくれないか」

そう言ってポケットからだした。

「それは解毒剤じゃないか。」

「博士だって宮野志保に戻ってほしい気持ちあるだろ?」

それに俺はあいつを守る約束したんだ。」

「うむ、分かった。」

この言葉から工藤新一の秘密の計画が進められていった。

第六話 秘密の計画（後書き）

話の展開が速いと思うのはわたしだけですかね？
次回もがんばります。

第七話 コナン君さようなら

今日は久しぶりに少年探偵団と久しぶりに遊ぶ日。
みんなは楽しみにしてる。

だけど今日は、江戸川君がいなくなることをいう日。
そんな事を思っていたらに米花公園についた。

「あーいちゃん。」

「あら、歩美ちゃん。速いわね。」

彼女は嬉しそうな笑顔で、

「うん。だって、久しぶりに遊べるんだもん。」

「おいオメーラ。」

「二人とも。」

歩美ちゃんは、二人のほうへ走っていった。

「おはようございます、灰原さん。」

「おはよう、灰原。」

「おはよう、二人とも。」

みんなはニコニコしている。

これから起きることも知らずに。

「オメーラ来るのはえーな。」

「コナン君。」

彼らたちに比べて暗かった。

「どうしたんですかコナン君？」

「暗くなってよー明るく行こうぜ。」

「わりーな。」

「話したいことがある。」

「なんですか？」

表情は曇っている。

「実は両親の所へ帰ることになったんだ。」

「嘘だよな。」

彼女は眼をウルウルさせながら聞く。

「本当なんだ。」

「少年探偵団はどうするんですか？」

「そうだよ。オメーがいないと少年探偵団は崩壊だよ。」

二人とも、もう泣いてる。

彼は笑い

「何言つてんだよ。そんな事ねえだろ。どんなに遠くても俺らは少年探偵団だろ。」

「そうよ。私たち少年探偵団でしょ。」

「はい。」

「そうだよね。」

「俺たち少年探偵団だ。」

三人は涙を拭いて笑って言った。

蘭サイド

「ただいま。」

「おかえり、コナン君。」

コナン君の顔がいつもより暗かった。

「どうしたのコナン君？暗い顔をして。」

「実はね、お母さん、お父さん所へ帰ることになったんだ。」

「よかったね。」

泣いちゃだめ、コナン君にとっていい事なんだから。

なのに、眼から涙がでてきた。

「ごめんね、泣いちゃって。」

「ううん。今までありがとう。」

ついに、ずっと暮らしていたコナン君との別れが来たんだ。

「なかなか言えなかったんだ。」

私はなぜかコナン君の事を抱きしめていた。

「蘭姉ちゃん……」

「ごめん。私の事忘れちゃだめよ。」

「うん。」

そして手を離れた。

「じゃあ今日はコナン君の好きな食べ物作ってあげる。何がいい？」

「ハンバーグ。」

「気合い入れて作るわよ。」

コナン君に見らねないように泣いた。

別れの時に笑顔でさよならできるように。

さようなら、コナン君。

第七話 コナン君さようなら（後書き）

割り込み投稿があつたので回想シーンとして使いませんでした。
すいません。

第八話 騙された私

最近江戸川君は変。

妙に浮かれてるし、私の事をニヤニヤ見てくる。

工藤新一に戻ることを蘭さんに会えるからだろうか？

それでも、辻褄は合わない。

解毒剤を渡し一週間がたった。

今日は彼が工藤新一になる日。

そして、私との関係が切れる日。

小林先生にはもう転校手続きをした。

だから、江戸川君の席は、空席だ。

でも、少年探偵団は知っている。

昨日、江戸川君が言ったのだ。

でも、ほかの人たちはそんな事を知らずのんきに騒いでる。

ガラガラ

小林先生が入ってきた。

みんなは席に戻っていった。

「起立、礼、おはようございます。」

「おはようございます。」

「みんなおはよう。ここで、残念なお知らせがあります。江戸川君が転校しました。」

「えー。」

クラスで人気者でもてて性格がよい彼が転校した事はみんなの心にぽっかりあけた。

その知らせを聞いたみんなは元気がなくなった。

その日はみんな元気がなかった。

家に帰ると江戸川君がいた。

「なんもしてないでしょうね？」

「当たり前だろ、もう江戸川コナンはこの町にいないんだからよ。」

「まあ、そうね。じゃあ、もう一度説明するわよ。」

「この解毒剤は、痛みを少なくするために二十分ほどかかるわ。」

「…」

「江戸川君聞ってる？」

そう言っていると、ニヤリとし、私の口に解毒剤を入れた。

「なっ！」

「一緒に大人になろうな。」

そう言って彼は薬を飲んだ。

そうして私は眠りについた。

第八話 騙された私（後書き）

これでやっと新志ですが、次回は回想シーンです。
次回も読んでください。

第九話 宮野志保と工藤新一の始まり

眼が覚めるとベットにいた。

クローゼットを開けると大人向けの服があった。

服はどれも派手だ。

その中から一番シンプルな白のレースの服を着た。

二人とも企んでたのね。

後でお仕置きね。

リビングに行くと、博士がいた。

「哀君無事だったのか」

そう言つて涙をこぼした。

怒る気なくなっちゃったじゃない。

そんなに心配されてたら。

「もう、灰原哀じゃないわ。宮野志保よ。」

「そうじゃな。」

「工藤君は？」

「新一なら向こうの部屋にいるぞ。」

私はドアをたたいた。

コンコン

「工藤君はいるわよ。」

「ああ。」

そこには十九歳の彼がいた。

「灰原…」

「宮野よ。」

「それよりどういう事かしら。」

彼の顔が引きつる。

きっと私が不気味な顔を浮かべているのだろう。

「いや、戻ったほうがいいかなーと…」

「覚悟しなさい。」

「志保君、新一君来てくれ。」

私はツカツカと彼の部屋から出ていった。
彼も遅れてきた。

「新一、感謝せい。蘭君と同じ米花大学に進学させた。」

「ああ…」

嬉しそうな笑顔ではなく複雑な感じがする。

「なにそんなしよぼくれてるの。」

「いや何でもない」

「志保君には東都大学がいいと思うんじゃ。」

「だめだ。」

反論したのは工藤君だった。

「宮野は俺が守るんから米花大学だ。」

「何言ってるの。あなたは蘭さんを守ればいいの。組織が壊滅した
今守る必要はないわ。」

「志保君は東都大学にもう進学させたから、それは無理じゃ。」

「分かったよ。」

「宮野よろしく。」

彼は笑顔で握手を求める。

その笑顔が私の気持ちを惑わせる。

「ええ、よろしく。」

ここから宮野志保と工藤新一の歯車が回り始めた。

この先の運命を知らず…

第九話 宮野志保と工藤新一の始まり（後書き）

次は新一サイドです。

話はあまり進まないと思います。

「別れ」を読んでない人はぜひ読んでください。
次回もよろしく願います。

第十話 俺が守る

あいつが東都大に行くって聞いて正直びっくりした。
俺が守るって約束したのに…

遠くへ行ってしまうのが嫌だった。

あいつは東都大に結局行ってしまう。

むかつく。もどかしい。もやもやする。

「は」

ため息。

自分が嫌になる。頭からあいつが離れない。

なんなんだこの気持ち？

俺は頭をかく。

あいつの所へ行こう。博士に説得しに行かねえと。

あいつと俺の…

あいつと俺の何なんだ。

こんな事を思いながら博士の家に行った。

ピンポンピンポン

返事がない。

「宮野、宮野。」

まさか組織の残党に？！

でてくれ、でてくれ

「なにようるさいわね。」

宮野志保だ。

「宮野。」

俺はあいつを抱きしめた。

「なんなのよ工藤君。はなしてよ。」

「組織の残党に連れさらわれたかと思った。」

彼女は微笑で答えた。

「そんなわけないでしょ。それより離してくれる。」

「ああ」

もうちょっとはさすがにダメか。

「一緒に東都大学に行こう。」

彼女は戸惑ってる。

「はっ？何バカなこと言ってるの。あなたは蘭さんがいるでしょ。」

「お前の事心配なんだ。」

「馬鹿じゃない。もう守る必要はないわ。」

「そう言うと思った。博士に話すな。」

「ちよつと待って。」

俺はあいつの話を聞かずツカツカと入った。

博士がパソコンでいろいろやっている。

「博士。」

「新一君。」

「俺を東都大学に行かせてくれ。」

第十話 俺が守る（後書き）

なんとこんなに速く投稿で来た！感激！
進んじやった！ごめんなさい（+|+）
次回もお楽しみに！

第十一話 届くはずのない手紙

「新一君：ありがたいが蘭君の事もあるじゃろ。」

何言っているの：工藤君。

「ああ、だけどこいつが心配なんだ。」

「心配なんかいらないわ。」

私は工藤君方へ歩いた。

「あなたは私にかまけてる暇があったら蘭さんに告白しなさい。」

「お前の事の事心配してやってんじゃねーか。」

なんでそんな事を言うの？私を惑わせないで。

「博士、頼む。」

「博士、やめて。」

「そこまで新一君がいうならいいんじゃないがどうしてもか？」

「ああ、頼む。」

「何言ってるの。あなた馬鹿じゃない。」

私は自分の部屋へ帰った。

入ったらしつかり鍵を閉める。

ここが本当の心を吐き出せるから。

私は机の二番目の棚から一冊の手帳を出した。

開いてボールペンで書き始めた。

工藤君はなぜか私の大学に入った。

正直うれしいけど、つらい。

何もかも捨てられたらと思う事が多くなってしまった。

馬鹿よね。お姉ちゃん。

いつそのこと、遠い所に行ってしまうたい。

それはいけない事なのかしら。

毎日私はお姉ちゃんへ手紙を出している。

天国にいるはずのお姉ちゃんに…

もしかしたら届くかもしれないという期待。

こんな、非現実的な事を信じるなんてあたしらしくない。
きつと工藤君に見せたら笑われるわね。

私はボールペンを入れ、手帳を二番目の棚にいれた。

第十一話 届くはずのない手紙（後書き）

うん。

うまくできない…。

こんな作者ですが今後もよろしくお願いします。

第十二話 再会

プルプルプル

その音を聞き携帯電話をとった。まだこの携帯は変えてない。

新一からもらった最後のプレゼントだ。

これ以来、電話で『おめでとう。』としか言わなくなってしまった。

「もしもし」

「蘭か？」

「新一！久しぶり。どうしたの？」

久しぶりの電話で、喜びに満ちている。

「ちよつと、見てみるよ。」

私は窓から外を見ると新一がいた。

「新一。」

私はその嬉しさに涙が出た。

私は涙を服でぬぐい、外へ飛び出していった。

「蘭。」

久しぶりに見た新一はとても大人びていた。

「新一。」

私は新一のもとへ駆け寄った。

「おかえり、新一。」

「ただいま、蘭。」

「もう、私から離れないでね。」

「…」

なんで答えてくれないの？

私たち愛し合っているんじゃないの？

だから待っててって言ったんじゃないの？

『うん』って言ってよ新一。

「俺、東都大に行くことにしたんだ。」

「えっどうして？」

私は米花大学に行くのに…

「ちよつとな…じゃあな、蘭。」

「ちよつと、待ってよ新一。」

私の声を聞かず、帰ってしまった。

やつと会えたのに、もう私たちには障害はないはずなのに、新一は…私を見ていない。

第十二話 再会（後書き）

ついに蘭と新一が再会！

次回はだぶん志保ちゃん出ます。

第十三話 学部

俺、変だな？

あんなに会いたかった蘭に対して言えなかった…

『好きだ。』

あんなに思っていたのに…

なぜか言えなかった。

そんな事を考えながら博士の家に向かった。

ピンポン

インターホンを押すと、ドアから宮野が出た。

「用は何？」

冷たく彼女は言った。

「お前、客人に対しての第一声がそれかよ。」

「ええ、あなただから。」

「お前可愛くねーな！。」

「結構よ。」

その会話は俺の心を和ませる。

「入って。」

宮野はそう言って部屋へ案内した。

「コーヒーでいい？」

「ああ」

落ち着く…

二、三分たつと、コーヒーを二つ持ってきた。

「で、用は？」

「お前さー、どこの学部に入るんだ？」

「別に、関係ないでしょ。」

彼女はそう言い放った。

「そんな言い方ねえだろ。パートナーなんだからよー。」

「はっ？私はあなたのパートナーになつたつもりはないわ。」

そんな事より、蘭さんに言った？」

「いいや。」

宮野はその言葉を聞くと、少し声を高くさせながら言った。
「速く言ってあげなさいよ。安心させてあげなさいよ。」

宮野は蘭を明美さんに重ねているんだと思う。

だから、蘭に幸せになつてほしいと思っっているんだと思う。
俺も蘭に告白するべきだと思っっている。

だけど、だけど…なぜか言えないんだ。

「工藤君、工藤君、どうしたの？」

その言葉で俺は我に返った。

「あ、わりい。」

「そついうあなたはどの学部にする気？」

宮野は医学部に行くと思つたから…

「俺は、医学部に行こうかなと…」

「そう。」

「お前はなんなんだよ？」

「あなたとちがうわ。」

シヨックだった。

「あら、博士。」

その声を聞きドアを見ると博士がいた。

「おお新一君、来てたのか。」

「ああ。」

「工藤君、医学部に入りたいらしいから」

「おお分かった。じゃあさっそく手続きをしよう。」

「博…」

ボタン

呼ぶ暇もなく、博士はこの部屋から出ていった。

第十三話 学部（後書き）

なんか、自分が思い描いてた小説と変わってきてしまった…
そんな小説でも読んでくださーい！

第十四話 悲しい理由

彼はきつとおかしいと思ったでしょう。

博士が彼の話を聞かなかった事を…

工藤君が出て行ったあと、博士に言ったのだ。

工藤君が医学部と言ったら私は薬学部に入り、

工藤君が薬学部と言ったら私は医学部に進むと…。

彼の幸せな顔を見るのがつらかった。

蘭さんと幸せになってしまふのを直接見るのも…

なんて醜い心。

自嘲的な笑みを浮かべた。

もちろん蘭さんには幸せになってほしいと思ってる。

でも…

「おい、宮野？」

彼の言葉で自分の世界から抜け出した。

「用はこれでもう終わり？」

「あ、ああ。」

「私は地下室で研究しているから帰っていいから。」

「あ、ああ。」

そう言って私は部屋から出た。

第十四話 悲しい理由（後書き）

かなり短くなりました（+ | +）
次は長くしたいです。

第十五話 入学…出会い

私たちは東都大学部に進学する。

裏口入学だけど…

まあ面接はあったけどね。

これから私たちは、初めて授業を受ける。

「じゃあな、宮野。」

「ええ。」

そして別れた。

ザワザワ

教室はみんなが話していたので、ざわついていた。
どうせ、工藤君のことでしょう。

彼は人気者だから。

なんとなく、彼の事が遠くにいる感じがして、
なんとなく、悲しかった。

「あの、名探偵の工藤新一君が医学部に進学したんだって。」

「えー私も医学部行けばよかった。」

「やだ〜。あなた工藤君にぞっこんじゃない。」

「そついうあなただって…」

そんな話が聞こえるなか、授業が始まった。

授業が終わり、帰ろうとすると、

「宮野〜〜〜〜」

という声が聞こえた。

振り向いてみるとやっぱり彼。

「あら、工藤君。」

「宮野、一緒に帰ろうぜ。」

本当は嬉しくて、『いいわよ』って言いたかった。

「ただ、出る言葉は…」

「別にいいわ。事件体質の人となると巻き込まれそうだから。」

「俺は疫病神か」

「あら違うというの？」

「…」

彼は黙りこんでしまった。

「ただ、何となく一緒に帰れそうで嬉しかった。」

「ほら、先行くわよ。」

「おい、ちよつと待てよ。」

「新一〜」

声のいたほうに振り向くと…

「おー蘭。」

蘭さんは走って工藤君のもとへ言った。

そして蘭さんは私を見て、すぐ新一君を見て

「この人、誰？」

第十五話 入学…出会い（後書き）

出会った二人、そしてこの二人の運命はいかに。
なんちゃって次の次回予告？でした。
次回もお楽しみに。

第十六話 瞳

本当は、門に来る時驚かそうと思ってた。

だけど、新一が私に見せていた笑顔を誰かに見せていた。

あの笑顔は自分のものだったのに…

そう思ったら、門から飛び出していた。

彼女を直視できなかった。

見たらきつと嫉妬してしまう。

でも誰だか知りたくて…

「この人、誰？」

新一がちよつと困ったふうになり

「うーんと、博士んとくに居候してて…」

それをさえぎり彼女が

「宮野志保よ。」

その時初めて宮野さんを見た。

ハーフ、吸い込まれそうな瞳、パーマ風の赤みがかった髪、華奢、

白くきめ細かい肌、スタイル抜群、

八頭身美人、すらりとした足、胸大きい、きれい、細い足…

私が知っている人の中で一番美人だと思う。

「あつ、毛利蘭です。」

「よろしくね。毛利さん」

「よろしく宮野さん。」

暖かくて、やさしい声。

誰かに似ている。誰だろう？

「失礼ですけど、あつた事ありますか？」

宮野さんの顔が一瞬こわばって、何事もなかったかのように、

「いいえ、ないわ。」

帰り道私たちは一緒に帰った。

自分で言うのもなんだけど新一にべったりだった。
怖かった…

新一が宮野さんに取りられてしまうのが
だって、新一を見る宮野さんの瞳は…
恋している時の瞳

第十六話 瞳（後書き）

今回も読んでくださりありがとうございます。
次回も読んでください。

感想、評価もよろしく願います。

第十七話 危険

入学してから一週間。

うざい、うざい、うざい。

呼び出される時の言葉はきまりきっている。

「宮野さん好きです。」

「悪いけどあなたをそういう風な対象として見れないから。そしてうなだれる。」

はつきり言つて、喋ったこともない男と付き合えるわけがない。

まあ、工藤君以外の人は付き合えないけど…

工藤君は蘭さんがいるし…

「フー」

恋なんてするもんじゃないわね。

最近、蘭さんも一緒に帰っている。

工藤君んべつたりで、まあ当たり前なんだけど…

もちろん工藤君の事は好きだけど、

蘭さんから奪って恋人になりたいわけではない。

むしろ、蘭さんは工藤君と一緒に幸せになつてもらいたい。

だけど、工藤君と付き合いたい。

私って欲張りね。

私はラブレターを開いた。

宮野さんへ

12時50分に備品室に来てください。

時計を確認すると12時40分だった。

「急がなくちゃ。」

私は備品室にむかった。

備品室に行くときえない男がいた。

「宮野さん、付き合ってください。」

ほら同じセリフ

「悪いけどあなたをそういう風な対象として見れないから。」
引き返そうとしたら

「どうしてですか？納得できないです。

付き合っている人がいるんですか？」

「いないわよ。」

男の目は怪しく光った。

「ならいいですよね。」

その男は手をつかみ壁に押し付けた。

力いっぱいして逃れようとしても男の腕力にはかなわない。

「宮野さん、好きですよ。」

第十七話 危険（後書き）

この二人いったいどうなっちゃうのでしょうか？！
次号急展開！！（たぶん）

第十八話 本当の気持ち

「い、いや。」

男の口が近づいてくる。

ドン

「やめろ！」

扉を開けやってきたのは工藤君だった。

「何だよお前。邪魔すんじゃないよ。」

「俺はこいつの彼氏だ。」

えっ…

「俺お前の事知ってたよ。工藤新一。」

いつもお前違う学校の彼女と一緒に帰ってんじゃないか。」

ズキリ、心の傷が開く。

「蘭はただの幼馴染だ。こいつを離せ。」

嬉しい心と罪悪感が私の心に広がる。

「ちっ」

男は舌打ちして帰った。

「ありがとう。工藤君。」

彼に素直に気持ち伝えたの久しぶり。

「大丈夫か？」

「ええ。」

嬉しかった。

いつもピンチになると助けってくれる

彼が…

好き

男を撃退するためだとはいえ蘭の事をただの幼馴染と言ってしまっ
た…

でもなぜかしっくりくる。

この気持ちはなんなんだろう？

あの男に対してのどす黒い気持ち

怒り、憎しみ、悔しさ

悔しさ？

これじゃあまるで『嫉妬』じゃねえか。

俺は宮野の事が好き？

そんなはずはない俺は蘭が好きなのはだ。

でも、そしたら、辻褄が合う。

俺は本当に宮野が好きなのか？

なんか心が温まった感じがする。

俺は宮野の事が好き。

それが本当の気持ちらしい。

第十八話 本当の気持ち（後書き）

遅れました。すいません。

次回も遅くなるかもしれませんがよろしくお願いします。

第十九話 悩む蘭

とある喫茶店で私は園子に相談したい事があると言って呼び出した。

「どうしたの、蘭。何？新一君とののろけ話？」

「うん、違うの。」

園子は驚いた顔をした。

「じゃあ、なんなのさ？」

「新一、何も言ってくれないの。」

最近宮野さんっていう人と仲イイし……」

「えっっ！！何にも言われてないの？」

「うん。」

「告白も？」

「うん、てっまだ新一が私を好きだとは……」

「あの男……なんにも言っていないの?!」

「うん。」

「あの男、妻をこんなに待たせて。」

「私たち夫婦じゃないよ!!」

顔が少し紅くなった事を自覚しながら言った。

「じゃあさ、トロピカルランド誘ったら？」

「えっ！っでも」

「大丈夫よ、蘭。あんたと新一君の絆は

その宮野さんに負けるほどやわじゃないでしょ。」

「う、うん。」

少し心が軽くなった事を自覚しながら時計を見るともう新一たちが帰る時間だ。

「園子、ありがと。そろそろ、迎えに行ってくるね。」

「相変わらず、らぶらぶね。」

「もう、そんなんじゃないってば。」

そんな事を言いながら、私は東都大学に向かった。

あれから何日かたち、

帰りは俺と宮野と蘭の三人で帰るのが

日常になってきたこの頃、

「ねえ、新一。来週の日曜日遊ばない？」

「おお、いいな。三人で遊ぼうか！」

そうすると蘭は少し悲しそうな顔になる。

コナンになり蘭の気持ちを知った今なら

なぜそんな顔をしてしまうか分かってしまう。

「私、別に大丈夫よ。二人で遊んだら。」

「お前、でも全然外出てないじゃないか。」

「で、でも…」

「まあ、来週の日曜日ば〜っと遊ぼうぜ！」

「う、うん、そうだね。宮野さん行きたい所ある？」

俺どうすればいいんだろうな。

蘭を待たせていたのに、宮野のことが好きになってしまった。

「私、あんまり外に出たところないから。」

「じゃあさ、トロピカルランドは？」

俺はおもわず顔をしかめた。

「ダメ？」

「あついいんじゃないか。」

「宮野さんはどう？」

「二人がいいと思うならいいと思うわ。」

「じゃあ決まりだね。」

こうして、あの運命の場所『トロピカルランド』で
来週の日曜日遊ぶことが決まった。

第十九話 悩む蘭（後書き）

遅れました（＋＋＋）

しかし、今回はいつもより長いですよ

ちなみに最初は蘭、次、新一視点でした。

また遅いと思いますが、よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0632h/>

俺とあいつとの恋NEW

2011年3月10日08時14分発行